ビブリア

発行　いわき市平上荒川字長尾３０
福島工業高等専門学校
編集　図書委員会 ビブリア編集部
平成 7年 7月 20日

福島高専図書館報　第７９号

巻　頭　言

５年生になると間もなく就職戦線が待ちかまえている。ここ数年、バブル経済の崩壊や円高不況などが続き、就職戦線も「氷河期」とよばれる程厳しく、好転の兆しも見られず当分この状況は続きそうである。業績のよい企業でも多くの応募者の中からより優秀な精鋭を選りすぐることができる「買い手市場」となっている。
このような企業の採用担当者の話を概括すると、

（１）基礎学力がしっかり身に付いている。

（２）自分の考えを論理的に表現できる。

ような学生が望まれるようである。
（１）に関しては特に専門基礎科目の目次・内容というシナリオについてそのクライマックスがどこかを含めたストーリーとして専門外の人（例えば両親）にも分かり易く話せる位理解しておくことが必要である。
それには、教科書以外の参考書で確認することが有効である。幸い、本校図書館にはこの類の参考書は豊富である。大いに利用してほしい。
（２）に関しては「高専生はまじめであるがおとなしい」という企業側の評価が多い。
言い換えると、議論を深く掘り下げていくことが不得意である、ということである。
これは、日頃から物事をよく考える習慣が身についていないことに起因する。
最近、大企業の中に有名大学偏重から実力重視に切りかえて、大学院から高専まで同列で採用試験を行うところも出てきているが、残念ながら高専生はどうしても自己表現能力の点で劣勢であるようである。
発想力や論理的思考を高めるには、新聞や雑誌・書籍等の活字に慣れ親しむ以外にない。
先ずは手軽に新聞のコラムや論説などから論理の展開や考え方を理解することである。
（スポーツでも模範技を真似ながら自分に合うフォームを作り出すように。）
次いで雑誌や書籍から自分の疑いを解くような書物を探し、読み、考えるという作業をしていくことである。
忍耐も要するが考える技術者となるためには読書は避けて通れないようである。

（建設環境工学科教官　佐藤 恭輔）

目次

巻頭言　佐藤恭輔　・・・1
在校生にすすめる本　・・・2
私の推す一冊　・・・3
図書館便り　・・・10
お知らせ　・・・11

「私の薦める１冊」
電気工学科教官　鈴木　晴彦

「磁気浮上と磁気軸受」
（コロナ社，定価4944円）
電気学会磁気浮上応用技術調査専門委員会編

物を非接触で宙に浮かすことは、遙か昔から、また東西を問わず人々の憧れであるように思う。ことに乗り物に関しては航空機やロケットを代表に、最近はリニアモーターカーの様な形で実現しているが、これらには膨大なエネルギーと巧みな制御技術が伴われている。本書では、電磁力を使った浮上がどの様な理論のもとに成り立ち、現実の機器として研究開発されているかを詳細に記載している。

構成は６章からなり、内容的には電気機械技術の中に位置する磁気浮上技術の歴史的変遷から、磁気浮上の理論、その応用例を紹介した後、磁気軸受けの理論とその応用例について解説している。

第一線で活躍中の各研究機関の研究者が、ごく最近の研究や近未来に実現するであろう磁気浮上のシステムまでも紹介しているので、かなり専門的な書物といえるであろうが、興味がある部分を選べば、工業高校、高専生からでも理解できる内容を含んでいる。また執筆者が多数におよんでいるので、単著者の本にはない個々の研究主張がいたるところで現れており、この分野の研究者が読むには面白い側面をも持つ。

絵で読む『広島の原爆』

（那須正幹＝文／西村茂雄＝絵／
福音館書店刊／定価2500円（税込み）／
１９９５年３月３１日発売）
コミュニケーション情報学科教官　内山　昭代

私たちには、忘れられない日があります。忘れてはいけない日があります。

－－－１９４５年８月６日、午前８時１６分。広島に原爆がおとされました。－－－

『広島の原爆』は、この日の生存者の証言をもとに再現された広島の町と、そこに暮らす人の様子が描かれています。

被爆した人が飛び込んだ橋の上に立ち、現実の光景と５０年前とを見較べることができます。

核兵器の原理、放射線障害、核軍拡、原子力発電など、被爆後５０年の核に関する基本的な知識も織り込まれています。

著者の那須正幹さんは企画から執筆まで７年を費やし、西村繁男さんは、広島の町に１年近く住み込んで取材し、鳥瞰図のスタイルに描き上げました。大型（Ｂ４判変型）で横長の本を開くとさらに倍の大きさで、広島の町が絵巻物さながらに展開されていきます。

まさに『広島の原爆』は絵で読んでもらう様に工夫された本であることが伝わってきます。

１９４５年８月６日を私たちは語りつぎ、読みついでいきたいと思います。

「マルチメディアマインド
（デジタル革命がもたらすもの）」
（浜野保樹　ＢＮＮ　１９９３／１２／２５）
コミュニケーション情報学科教官　布施　雅彦

日々刻々と社会が変化していく中で、情報化の波は、近年そのスピードを増すばかりであります。そして、従来アナログで処理されていた情報も、デジタル処理の割合が大きくなっています。情報の種類や媒体も変化し、マルチメディアという言葉を、頻繁に耳にすることが多くなりました。

この本は、人間のイマジネーションが進化し、そのイマジネーションの表現方法や情報伝達媒体としてのあり方の変遷について書かれています。出版、映画、アニメ、コンピュータ、マスコミ、ＴＶ等においてあらゆる視点からとらえ、文章から著者の熱意が伝わってきます。

また、メディアテクノロジーによる「認知」のあり方について、直接認識できる現実の領域はメディアテクノロジーによって伝えられる現実に次第に浸食され、現実というもの自体の概念がメディアテクノロジーの前で揺らいでいるように感じることができます。

この本は、現在の人間のイマジネーションとメディアテクノロジーの融合が、２１世紀における新しい世代の情報活用やプレゼンテーションのあり方を感じさせてくれる１冊であるような気がします。

「私の薦める１冊」
一般教科教官　田辺 義明

『ワイルド・スワン鴻』上・下
ユン・チアン著（講談社刊、各1800円）

本書は単なる「女の三代記」ではない。旧中国が新中国へと脱皮しようとする胎動の現れでもある。祖母が“封建社会”に生き、母が“軍閥時代”に生き、また当人もかの“プロレタリア文化大革命”のなかを生き抜いた。これは３人の１００年間の記録でもあると同時に、同時代に生きた数億人の記録とも符合する。

中には残酷な記述も多い。“纏足（てんそく）”、女の子の足の骨を砕いてがんじがらめにしてしまう風習や、６０年代の“大災害期”において、自分の赤ん坊を食べてしまった話など。しかしそれらは誇張ではなく、評者が実際に中国農村に入って見聞きした事例でもある。何代にもわたって、娘を売り生計を維持して来た家庭など珍しくもない。それらの内容は、いわゆる“傷痕文学”ならではの凄惨さである。

そのような中国が人権をないがしろにしてきたかといえば、そうとは限らない。数億の民が食べていけることこそが、中国における「人権」なのである。

多くの読者は、本書によって毛沢東の主導下に発動された“プロレタリア文化大革命”の内実について、知らされるところが多かったに違いない。当時の日本のマスコミ各社はこぞって、この“プロ文革”こそがアジアの革命の記念碑だと、評していたからである。

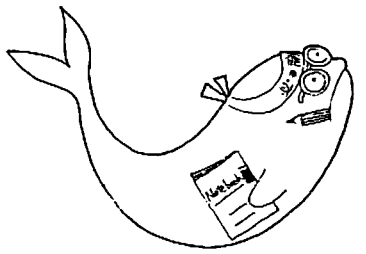
ともあれ一部でベストセラーとなったこの『ワイルド・スワン鴻』をドキュメンタリー文学の最高峰に位置するものとして、ここにおすすめする次第である。

「高校生のための批評入門」（筑摩書房）
一般教科教官 石原 万里

人の話を聞いていて、確かにそうだと納得する時と、ちょっと違うなと思う時とがあります。その違いがどこからくるのか、問いかけてみてください。世界の中の個である自分を自覚したときから、批評は始まります。

「高校生のための批評入門」（筑摩書房）を手にしたのは、高校生を終わって何年もたってからでした。入門書のつもりで読み始めたのですが、自分ではわかっているつもりでも、言葉では表せなかった漠然としたものが、平易な言葉で解き明かされていくのに驚き、じっくりと読んだものでした。「批評」とは何であるかを明確に教えてくれたのもこの本でした。作品にむかい合っている自分を主体に置くこと。簡単なようでとても難しいことなのです。

この本には５１編の文例が集められています。評論が主ですが、エッセイも対談もあり、テーマは多様です。各文例には必ず設問がついていて、問題を解いて解説を読むのは、楽しみと言ってもいいくらいでした。どれも心動かされる文ですが、中でも良知力さんの「春と猫塚」は、何度も何度も読み返しています。



《私の推す一冊》
１年 機械工学科　佐藤 直樹

僕が、読んでいいと思った本は『三国志』です。読んでいていいと思ったところを書いていくと、まず「三国志」の舞台のスケールの大きさです。

日本の戦国時代は、狭い日本の中をちっぽけな戦いを繰り返していただけでした。しかし、「三国志」の舞台は中国全土で、一度に何十万という大軍がぶつかり、戦った武将だけで二千人はいるといわれています。

また武力だけでなく、あらゆる計略などを用いて、知力を尽くして戦ったところも僕がいいと思ったところのひとつです。また、人生のむなしさというものも感じました。この物語の中では、どんなに勇猛な武将でも志半ばで死んでしまうのです。

最後は、魏、呉、蜀の三国とも滅びてしまって、晋が、天下を統一するという意外な結末になってしまったけれど、とてもおもしろかったです。興味をもった人は、ぜひ読んでみてください。

《私の推す一冊》

1年 電気工学科　根本　潤一

三国志は日本でも人気のある物語だが、舞台になっている中国大陸とはなじみが薄い。舞台の中国大陸についてもっとわかれば、興味が一段と増すことはまちがいない。そういうことでこの「三国志　歴史紀行」は、日本の三国志ファンにとって、読んで損をするということは、まずないだろう。

三国時代の物語は日中両国において誰もが知っていると思う。私自身も幼い頃から三国時代の講談を聞くのが好きだった。そのせいか地図を広げてみても、行ったことのない三国志由来の土地が、よく知っている場所の様に思えてくるほどだった。

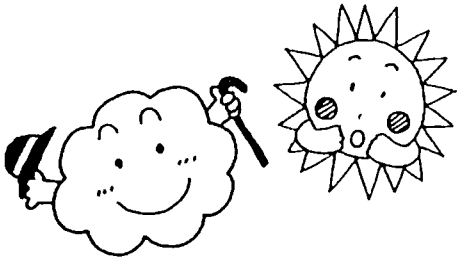
編集部で仕事をしている襲氏は中国の長い歴史を知るために、深い山奥に入ったり、鍾乳洞を探索したり、名所旧跡をまわったりと何度か危険な目に逢っても懲りたりはしなかった。そんなことから、彼には「我らが除霞客」というあだ名が付いた。

とても興味をひかれたところは諸葛孔明を求めて劉備が三度訪れたという三顧の礼である。わずか２７歳であった諸葛亮を求めて、関羽と張飛がいらだっている中、三度目に訪れた時やっと出会えたというエピソードだ。このことを杜甫は

三顧頻煩天下計　両朝開済老臣心

と詩句に読んでいる。

以上自分の興味をひかれたところであったが、もっとおもしろいところはあった。一度読み始めると、首が痛くなるまで読み続けていられる。ちょっと字が小さく、字が多いけれど、三国志時代の中国大陸の地図、時代の流れなど、三国志好きにとっては良いことばかりなので、ぜひ一度みなさんにも読んでもらいたい。



《ブルーバックス「数学質問箱」
矢野健太郎著》

1年 工業化学科　村山　英司

この本は、今まで自分が習ってきた「数学」に対する疑問、理由いわゆる「なぜ？」を集め、その質問に答えたものです。この本の質問の内容は、「数」「計算」「幾何学」「パラドクス」「進んだ質問」の５つに分類してあります。今まで数学を習ってきて、わけもわからず覚えて使っている計算のしかたはありませんか？

例えば「ゼロはどうやって発見されたのか」「ゼロは偶数？奇数？」「分数の割り算では、なぜ分子と分母をひっくり返したものを掛けるのか？」「マイナスとマイナスを掛けるとなぜプラスになるのか？」「６×０はよいのに、６÷０が計算できないというのはなぜ？」「半径ｒの円の面積がπr^2である理由は？」「円すい、角すいの体積が３分の１になる理由は？」「円周率πの求め方は？」、などといった質問の数々は、中学までの算数、数学で習ってきたものばかりです。いずれも「問答無用」と覚えてしまったものだと思います。

この本はこれらの質問に対してなるべく予備的な知識を必要としない回答を試みています。中には少々数学を使う回答もありますが、すべて話の筋道をわかりやすくしたような回答となっているので、素朴な質問に対する回答は、すぐに理解できると思います。著者は「この本の質問のように基本的な問題、いわゆる基礎をしっかりと身につけておくことが物事の上達の近道といえる」と書いています。

この本を読んで長年理解できずにいた事を解決できれば、数学にも強くなれるのではないかと思います。

《飯田譲治著「ＮＩＧＨＴ　ＨＥＡＤ」》

1年　建設環境工学科　磯上 幹夫

この本については、ドラマや映画で知っている人は多いと思いますが、小説ででていることを知っている人は少ないと思います。

１５年間、世間から隔離されていた超能力をもつ兄弟（兄直人：サイコキネシス　弟直也：リーディング）が、隔離されていた研究所から逃げ出すところから、この物語は始まります。１５年という世間との時間のズレに

加えて、特殊な能力を持つ彼らは「一般社会」と私たちが呼んでいる世間に順応できない苦しみを味わうことになるのです。そんな中で彼らはどうやって生きていくのかを模索していく・・・それがだいたいの内容です。

この本の特徴は、人間の心理的な面を正確についている点です。特に恐怖感や人間の暗い面の表現が恐いほど正確です。

内容も挿し絵も心臓の弱い人にはお勧めできないほど恐い場面まであります。

ところでこの本ですが、ドラマや映画を見てファンになった人が読むと、内容が大幅に違っていることに驚くかと思います。興味を持った人は、読んでみることをお勧めします。

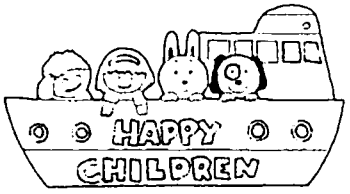
私の推す一冊　「沈黙の春－生と死の妙薬－」

1年 ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科 岩本 良子

現在、環境問題が深刻になってきていることは、誰でも知っていると思います。それと同時に、環境問題をくい止めようという動きも最近盛んになってきています。それらの運動に参加している人々は言います。「まず、自分のできることから始めましょう。」と。

しかし、いったいどれだけの人が環境問題の実体を知っていましょう。実体がわからなければ行動には移せないものです。この本では、人間の作り出した『便利な道具』が私たち自身にどんなしっぺ返しをしてきたかを刻々とつづっています。自然を忘れた現在の人々に魂のふるさとを思い起こさせるレイチェル・カーソン女史の声、そして刻々と自然を破壊し人体を蝕む化学薬品の浸透、循環、蓄積を追求する冷徹な眼、いま私たちは何をなすべきかを訴える逞しい実行力。ドイツ、アメリカなどの多くの国の人々がこの声に耳を傾け、十数年間、現実を変革してきました。

私たち日本人は何をしてきたのでしょうか。ドイツ、アメリカの人々に倣い、あなたも環境を改善するための第1歩をこの本を読むことで踏み出してみませんか。きっと心のどこかで忘れていた魂のふるさと『自然』が鮮明な映像となってあなたの心によみがえることでしょう。



「呪われた肖像画」

2年　機械工学科　清水 正彦

「呪われた肖像画」。

なんて魅力的なタイトルなんだろう。「呪われた」という言葉がたまらなく、僕を惹きつけて離さなかった、なんて冗談はおいといて。

というわけで「呪われた肖像画」。この本をみんなに読んでもらいたい。

大まかなあらすじをいうと、純真無垢な青年が描いてもらった絵を見てあることを望んでしまう。それによって彼は永遠の若さと美しさを得る。が、青年の代わりにその絵が醜くただれていく。この本には、そんな状況に置かれた青年の心の変化がうまく描かれている。

永遠の若さ、美しさという人間が一度は夢見てしまう、そんな望みが叶ってしまったらどうなるか。人として気になる一面もあるはずだ。

この紹介文を読んでいるあなたにもそんな一面があるかもしれない。そしてこの青年がどのように変わっていったのか、どういう末路をたどったのか、気にかかってきたことだろう。そう、そして本屋へ駆けつけて「ワイルド作・呪われた肖像画」を手に取り、青年の変化を感じ、自分の思うところに訴えてみよう。

しようがないといえばそれまでだけど、虚しすぎる青年の最期に、あなたは何かを感じるはずだ。

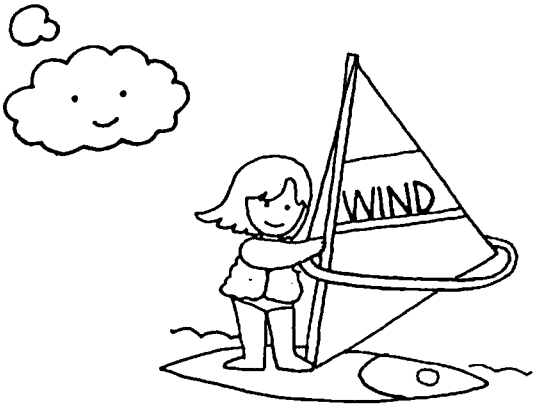
「新ＭＳ－ＤＯＳ入門（各種）の紹介」

2年電気工学科　渡辺 剛史

パソコンのことをある程度知っている人は、ＭＳ－ＤＯＳという言葉を聞いたことがあり、その大半は「なんで今更ＤＯＳなんか。」と思うでしょう。でも、これからパソコンを初めてみようかな、という人にこの本を読んでもらいたいです。と言うのは、パソコンの仕組みなども学べるし、なにより、パソコンは少し工夫すればなんとでもなるものだ、みたいなことが感じとれるからです。このような意識は初心者にとって大切ではないでしょうか。

この本は、「入門編」「シニア編」「応用

編」の３つに分かれていて、内容は次のようになっています。
「入門編」はＭＳ－ＤＯＳの基本のイロハ。
「シニア編」は少し難しい入門編。
「応用編」はＭＳ－ＤＯＳを便利に使いこなすための手段。というようなものです。
このなかで最も読んでもらいたいのは応用編です。応用編のページを適当にめくって、興味を持った所から読んで行くとよいと思います。また、まえがき、あとがき、などからも発見があるかもしれないです。
とにかく読んでみてください。

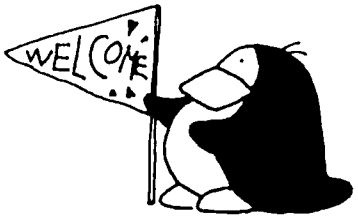


"ショート・ショートの広場"　星新一編
２年　工業化学科　服部　直明

私が推す１冊は、読み易さ、おもしろさ等の点から考えて、星新一編の「ショート・ショートの広場」である。この本は、１冊に約６０編収録されている。作品は、星新一氏が雑誌の応募作を選び、掲載された優秀作の集りである。
ショート・ショートを読む楽しみは、いわゆる「オチ」だと思う。話の流れを追って行き、最後に予想外の展開が起こる。この楽しさは、ショート・ショートでなくては味わえない物だと思う。本の嫌いな人は、理由は様々だろうが、「字が沢山あるのを見るといやになる」という人も多いかと思う。そんな人でも数ページの短い話ならば少しは「読んでみようかな？」と思う（はず）である。
ショート・ショートの話には、ＳＦ物やユーモアのきいた話など色々な話がある。どれか１編面白いと思うと次々に読んでいってしまうだろう。
やはり、自分自身で読んでみてその面白さを確かめてみてはいかがだろう。

「私の推す一冊」
２年 土木工学科 小松 律子

私の推す一冊。それは赤川次郎著の「禁じられたソナタ」である。舞台となるのは、名門中の名門である音楽学院、主人公はその理事長の孫娘２人。
理事長である２人の祖父の臨終の場で、姉の真由子には学院の経営を、そして妹の有紀子には、絶対に弾いてはならない「送別のソナタ」という曲の楽譜を託したことからこの物語は幕を開けるのである。まるでドラマのようなできすぎたストーリーであるが、やはりそんな展開でなければ、話は成り立たないし、読んでいたって何の面白さも出てはこないだろう。
有紀子の親友だけしか知らない楽譜の存在。まるで吸い寄せられるかのように、有紀子から楽譜をこっそり盗み出し、ずば抜けた才能を持つ恋人に渡してしまう。そして狂ったように弾き続けられる「送別のソナタ」。その背後で怪しげな影が動き出す。呪われたソナタが紡ぎ出す恐怖のメロディ。
もちろん悪役がいれば正義（？）のヒーローもいる。やはり、主人公の２人と、その恋人達。
実体を持たない「それ」に操られ、学院は恐怖の渦の中へ。亡き祖父がおかした忘れられた過去の犯罪。たった一曲の楽譜が全ての歯車をよみがえらせた。そして主人公たちの決闘。そして…。
あとは読んでのお楽しみ。赤川次郎の独特の文章の書き方が、自分がまるで物語の中の１人になっているような、そんな気にさせてくれる。読み終えた後のスッキリとした解放感も味わえるだろう。文才のない私ではとても「禁じられたソナタ」をうまく紹介することは不可能なので、実際読むことをおすすめする。



「私の推す１冊」
小説十八史略　陳 舜臣
２年　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科 大島 優佳

歴史が好きな人に、私がお勧めするのが「小説十八史略」。中国の歴史についての話ですが、これが実に面白いのです。今までに味わった事がないような新鮮さを満喫することができます。その上勉強にもなるので、これは必見です。

「小説十八史略」は別に歴史の教科書ではありません。難しく考えなくても良いし、もちろん覚えることだってありません。だから、歴史はちょっと……という人も大丈夫。読みやすい文章で分かりやすく、面白いから肩が凝らない１冊です。中国史なんか全然知らなかった私が言うのですから間違いありません。

実はこの本は友人から勧められたのですが少し読んだらやめられません。何度でも読みたい本です。量的に、そう何回も読める代物ではありませんが、忙しい人にも一度は読んでもらいたい一冊です。毎日ほんの少しずつでも、いえ、毎日でなくても休日を利用して、で良いのです。後悔しないのは確かです。だまされたと思って読んでみて下さい。

「フォレスト・ガンプ」
３年　機械工学科　若松 英徳

この本は１９９４年、アメリカ全土を魅了したフォレスト・ガンプの物語である。知能指数７０以下、人並み以上のめぐまれた体格を持ち、ベビーブーム時代の１人として生まれたフォレストの半生をこの本でたどってみるときに感じる、思いがけない深い安堵感はいったいどこから来るのだろうか。

素朴で、純粋な思いが報われる、そんな単純なことが、奇跡のようにすばらしく感じるのはなぜなのだろうか。

誰もが本当は知っていて、信じたいと思いながらも、いつの間にか心の奥底にしまいこんでいた、そんな無垢な部分だけを持っている人間こそフォレスト・ガンプだと思う。

１９６０年代のアメリカの歴史と人々の思想、人間観を知るためにも、一度読んでみるのはどうだろうか。

「吸血鬼幻想」
３年電気工学科　櫛田　麻衣

人類の永遠のテーマである善と悪の狭間、私たちとは別次元の存在、そんな微妙な位置にランクされているのが非現実的存在です。折しもオカルトブームの到来により、天使や妖精などの異世界の存在が取り沙汰されている中、一時のひやかしではなく、何世紀にもわたって（比較的新しい時代だが）世界中（特に西欧）を恐慌かつ魅了した存在といえばやはり「吸血鬼」でしょう。

今回私が紹介するこの本では、「吸血鬼」について、そのモデルとなったと言われているブラドー伯爵に代表される歴史的事実はもとより、文学、芸術、精神分析など多岐にわたる観点からかなり奥深く記されています。

吸血という非人間的行為が、何故ミステリアスかつエロティシズム的効果を生み出すのか、筆者の考察における理論の展開が、やや独創性に欠けるところを除けば、かなり面白く書かれていると思います。

「吸血鬼」という、耽美的、浪漫的存在をより深いところから知ってみたい方、この本を読めば、興味がそそられること間違いなしです。貴方も「吸血鬼」について、知識を深めてみませんか？

《トム達の暗示するもの》
３年 工業化学科　椎名 議子

トムとその友人達はとても自由奔放な心の持ち主に見えるが、実はそうではない。何故なら、彼らはとても迷信深いからだ。けれど、その迷信深さは彼らの想像力によるものである。

だが、大人とはいつでもそんな迷信深さよりも自分達の持つ信心深さを好むものだ。その信心深さによって、子供の邪悪な想像力を封じられると信じているのだ。

でも、どうだろう。
彼らからそんな迷信深さを奪ってしまったら、大人達は子供達にどんな日常を提供できるというのか。彼らはその想像力によってのみ日常を生きられるのに。そうすることで退屈な毎日を無意識に色付けでき、しかも唯一、それこそが彼らの命綱である。そんな日常の中で彼らが見ることができる未来とは蒸気船で

ある。
彼らは大いに機関士に憧れている。それはとても暗示的だ。何故なら蒸気船は海へは出ないけれど、川の先には海があるし、彼らの未来にも「海」があるのだから。彼らは自ら船を操る機関士となって未来を好きなように選びたいのかもしれない。私達のように。
とにかく、「トム・ソーヤーの冒険」は面白いので是非読んでみることをススメたい。

「ナチ統治下の民衆」
「太平洋戦争ガイド」
3年土木工学科　大平 育男

今年は第2次世界大戦より半世紀に当たる。諸メディアは終戦50周年記念の諸企画を打ち出しているが、その多くは日本を被害者としてとらえ戦争の惨禍を訴えるものだが、私はあえて戦犯国を連合国ともに公平にとらえ直し、戦犯国の罪悪のみならずその功績となり得る部分にも言及すべきであるとする。
本書は欧州戦線において絶対悪とされたナチスの統治下にあって民衆がいかなる生活をしていたかが客観的に述べられている。「ナチスは非道のみを働いたわけではない。とかくナチスについてはユダヤへのホロコーストが目に立つが、反面、建設的な政策も実行しており、ドイツの中にはナチスの時代を最良の時代であり、豊かな時代であったと回想している人さえもいる。」という。
あえて本書の内容から外れるが、同様のことはこの日本についてもいえる。
サンケイ新聞によれば、過日アジア外相会議で『日本による植民地解放によってアジア諸国は欧米の支配から自由を得て独立した。最近の日本にはもっと自信を持ってほしい。』という発言もあったときく。
また、『太平洋戦争ガイド』によれば、日本のアジア進出は、中国等独立国には侵略と取られる行為であり、植民地からは解放と見られる行為であったし、特に蘭領ボルネオ、ジャワ、スマトラは親日的であった、という。
この節目に日本人は先の大戦を客観的に自己評価すべきであろう。
本二書は、第2次世界大戦の全世界史的意義を理解するのに大きな意味のある本だと思う。

「ｄｏｊｉｄａｓ－ドジダス」
4年機械工学科　森　俊介

今日、紹介する本は「このドジだけは知られたくなかった」と当人を悩ます笑撃本「ｄｏｊｉｄａｓ－ドジダス」である。この本は世界中のすごいドジ話や有名人の「えーっ」っていうようなドジ話がぎっしりとつまっているである。読んでいて「プッ」と笑ってしまうような話や、「はぁー」と溜息をもらしてしまうような話があるが、ここでちょっとあるドジ話を紹介しよう。
「土俵の上でウンがつきた臭～い力士」という話。人間、リキむときは下っ腹にグッと力を入れる。そのとき、ちょっとリキむ場所をまちがえれば、もらしてしまうことだってある。あの都はるみが「はるみ節」をうなるとき、ついちびってしまったという話だってあるくらいなのだ。都はるみはバッチリ着物を着ているから、少々ちびっても目立たないかもしれないが、あの無防備な姿で人前に立っている力士にもしそんなことがあったら大変だ、と思ったらちゃんといたのである。
昭和50年代のなかば、本場所の相撲で、力士Ａはグッと踏んばった瞬間に……。
この続きを知りたい方は、この本を本屋さんで立ち読みして下さい。

「日々の泡」 ボリス・ヴィアン著
4年電気工学科　小野 文枝

この本は、肺の中にスイレンの花を咲かせて死ぬ少女クロエの悲しい物語です。しかし、人間の体の中で植物が育つという非現象的な設定ゆえに実際はコミカルな物語です。舞台が海外でおまけに60年代の物語なので文化の違いなど理解するのはちょっと難しいけれど情景や人物の描写などの表現の仕方が普通の言い方でなく、ボリス・ヴィアン独自の世界でおもしろいと思います。このボリス・ヴィアンはジャズ・トランペット奏者、シャンソンの作詞作曲家、歌手、俳優として生活を送る一方、詩や小説も書くというすごい人です。この本は、どちらかというと女の人におすすめの本です。時間がたっぷりある時に、ゆっくり読んでみて下さい。

「河童が覗いたインド」　妹尾河童
（新潮文庫　定価 560円）
4年 工業化学科　酒井　友子

ダ・ヴィンチという本の情報雑誌の中で、他校の女子高専生が「文章も絵も手書きで・・・・インドに行きたくなる本です」と推薦していた本です。

同じ高専の好(よしみ)で、とでも思ったのか、それとも「文章も絵も手書きで・・・」という不思議な本を見たいとでも思ったのか、私は次の日には、この本を手に入れていた。

確かに本の中身は今まで見た事も無い「全部手書き」という摩訶不思議な物だった。「可愛いかも」というのが最初の感想。

文章的中身はノンフィクション。著者の旅行記。その著者は巻き尺とスケッチブックを持ち歩き、自分の乗った列車や泊まったホテルの内部の寸法を計り、スケッチしたものを挿絵の中で紹介している。料金までも書いておいてくれる。

他にインドの人々との会話や生活習慣などが書かれているのだが、「インドって怖い所だ」と思わせてくれたと思ったら次の瞬間「インドの人って良い人だ」なんて考えさせてくれる文章を書いている。それに、旅行記なのだからインドの遺跡の紹介も多い。

色々なインドが見られて、確かに「インドに行きたくなる本」だった。

このシリーズにはヨーロッパとニッポンもあるが個人的に推薦できない。理由はただ「見れば分かる」とだけ云っておきます。

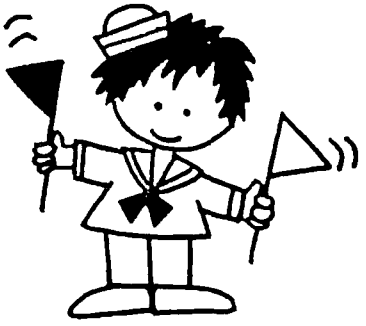
「たけしメモ」
4年土木工学科　大和田　義光

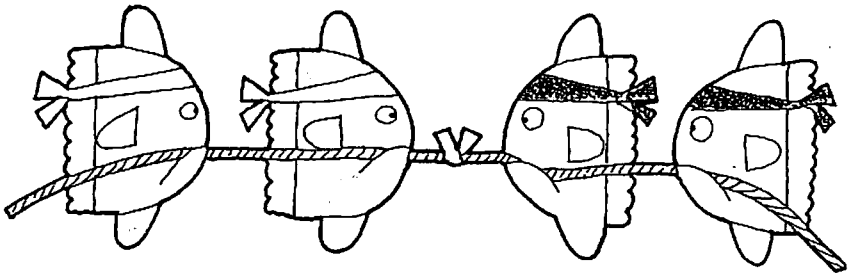
たけしメモ。言わずと知れた、「元気の出るＴＶ」のオープニングを締めくくるものである。放送開始からの、たけしメモをまとめたのが、この本である。この本はとてもくだらなく、そのくだらなさは、出版界のロイヤルストレートフラッシュである。さて、少しばかり例を挙げておこう。

―こんな女は嫌われる―
・アパートの屋上でハトを飼っている。
・歯ぐきが長い。
・放火現場に必ず現れる。
・耳毛が長い。
・死ぬまで、１人の男を恨んでいる。
・これだけ言っているのにまだわからない。

このようなものが、全ページにわたって網羅されており、「くだらない」のてんこ盛りである。この本の読み方としては、「ナイチンゲール」のような生真面目な本を読む姿勢ではなく、お茶の間で、だらだらと読むのがベストである。また、この本には、「元気が出るＴＶ」１０年間の歴史が紹介されており、そちらも面白い。

最近になって「ごっつええ感じ」などの裏番組に押されがちになっている「元気が出るＴＶ」であるが、これからも末永く続いて欲しいと思う今日この頃である。





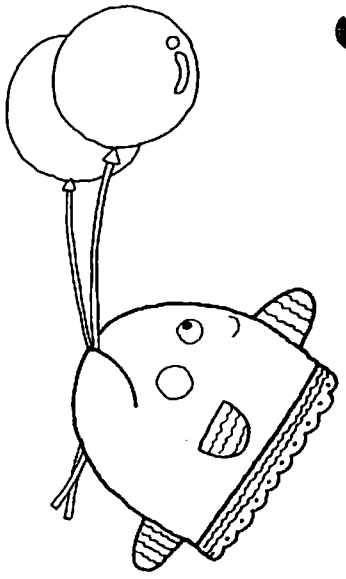
図書館便り

☆学年学科別図書帯出冊数（平成６年４月～平成７年３月）

学年	１ 年	２ 年	３ 年	４ 年	５ 年	計
機械工学科	１５	９１	８７３	４３９	２３３	１６５１
電気工学科	１３６	１５２	５９４	３０１	６２２	１８０５
工業化学科	１４９	３９３	９００	４９６	３３４	２２７２
土木工学科	２８	２６６	６８０	７９	２６２	１３１５
コミ情報科	４９０					４９０
計	８１８	９０２	３０４７	１３１５	１４５１	７５３３

☆ 図書貸し出し冊数ベスト１０（平成６年４月～７年３月）［学年は昨年度のもの］

1	加古　晶	（機械工学科３年）	１７８冊
2	高橋　淳	（電気工学科５年）	６５冊
〃	服部　直明	（工業化学科１年）	６５冊
4	赤津　洋子	（土木工学科５年）	６０冊
〃	野地　智彦	（電気工学科４年）	６０冊
6	阿部　義弘	（機械工学科４年）	５８冊
〃	小松　留美	（土木工学科３年）	５８冊
8	田辺　和也	（機械工学科３年）	５７冊
9	守岡　宗典	（機械工学科４年）	５６冊
〃	駒木根　文仁	（電気工学科３年）	５６冊
〃	櫨木　裕次郎	（電気工学科３年）	５６冊



お知らせ

臨時開館について

○ 開館期間　　8月17（木）～夏期休業終了日まで。

ただし、土・日曜日は閉館とします。

○ 開館時間　　午前の部　　8時30分～12時00分まで。

午後の部　13時00分～17時00分まで。

※　7月25日（火）～8月16日（水）は、館内所蔵図書の点検および整理のため閉館します。

特別貸出について

○貸出手続き　・・・・　7月12日（水）～7月24日（月）

○貸出限度冊数　・・・　5冊まで

○貸出期間　・・・・　7月25日（火）～夏期休業終了日

卒業研究生特別貸出について

○卒業研究生は、所定の手続きを行えば、別枠として5冊の貸出が認められます。

その他

○購入希望図書がありましたら、最寄りの図書委員を通じて、あるいは、直接図書係に申し込んで下さい。

感想文募集のお知らせ

今年度から、学生の皆さんに、より読書に親しんで頂くための一環として「読書感想文コンクール」を下記の要領で実施いたします。
ふるって参加して下さい。

記

1．形　式	１６００字程度の読書感想文 手書きまたはワープロ文書。 （フロッピー提出も認めますが、 ＤＯＳ文書であることとします。）
2．募集部門	以下の二部門で募集する。 ・低学年の部（１～３年生対象） ・高学年の部（４、５年生対象）
3．提出締切	平成７年　１１月末日
4．賞　品	低学年、高学年の部とも１～３位まで図書券が贈られます。
5．その他	・感想文は図書館事務室に提出すること。 ・それぞれの部門の第１位の感想文は、次回発行のビブリアに掲載する予定です。 ・応募は一人一編までとします。

平成７年度図書委員会

図書館長　　佐藤　恭輔（建設環境工学科）
副館長　（ビブリア担当）　大槻　正伸（電気工学科）

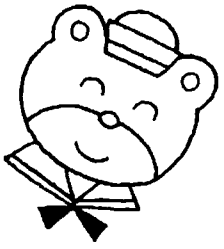
委員　佐藤　憲男（機械工学科）　山崎　數彦（電気工学科）
　　井上　和人（工業化学科）　根岸　嘉和（建設環境工学科）
　　石原　万里　（一般教科）　吉村　忠晴（一般教科）

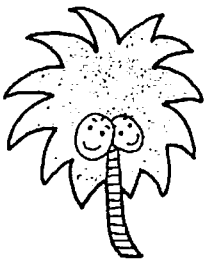
　　赤松　一良（庶務課長）　若松　芳男（図書係長）
　　浅川　春美（管理主任）　大谷　敦子（司書）

学生図書委員

５Ｍ	＊鈴木 和男	５Ｅ	松本 博信	５Ｃ	佐藤 香	５土	政井 信昭
４Ｍ	森　俊介	４Ｅ	大和田英樹	４Ｃ	酒井 友子	４土	大和田義光
			＊山田　寛章				瀬戸　隆寿
３Ｍ	蛭田 貴弘	３Ｅ	＊大高　裕幸	３Ｃ	蛭田絵美子	３土	澁谷 健二
	若松 英徳		松浦　弦一				
２Ｍ	鈴木 孝一	２Ｅ	＊渡辺　剛史	２Ｃ	岡田　祐美	２土	小松 律子
	小林 友和		遠藤　豪		吉田　友紀		豊田 千衣
２コ	＊大島　優佳						
	＊小関　祥子						
１Ｍ	橋本 勝	１Ｅ	常盤 竜太	１Ｃ	村山 英司	１建	＊磯上 幹夫
	黒田 利紀		根本 潤一				
１コ	阿部 絵季華						

（ ＊はビブリア編集委員）





編集後記

朝起きて、涼しい９時ごろから本を読み始めて、はっと気づくと汗ばんだまま夕方。夕食後も同じ本を読んで、寝入る前には、心地よい闇に幻覚のように文字が飛んでいるというような贅沢な一日が送れるのが夏休みのいいところだと思う。
このビブリアが、そんな充実した一日を送るための本の紹介に、少しでもお役にたてば、と思います。
よい夏休みを！！